

CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

RiITALIA (イタリア再発見) ⑮

Mafia Capitale

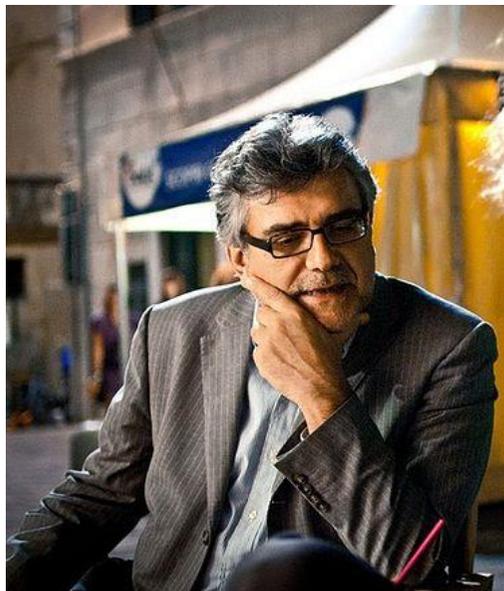
国司 航佑

La realtà supera la fantasia, supera il *Romanzo Criminale*. (現実が想像を凌駕しました。『犯罪小説』を凌駕したのです)。2014年12月4日、イタリアの報道・討論番組 *L'aria che tira*(吹く風)の冒頭で、司会者が述べた。

『犯罪小説』とは、2002年に発売されたジャンカルロ・デ・カタルドのベストセラー小説のことである。この作品は、まずミケーレ・プラチド監督によって2005年に映画化されヒットを飛ばし、またそれをもとに製作されたテレビドラマは、2008年から3年間に渡って放映され社会現象を引き起こすほどの人気を博した。実のところ、筆者もこのドラマシリーズの大ファンであり、1話50分程度の全22話をこれまでにおそらく4度以上鑑賞している。ちなみに、小説も一度手に取ってみたが、これはドラマに比べ迫力に欠ける。映画にいたっては、ストーリーの展開が不十分な上に俳優の演技も拙く、ドラマ版を見た後ではなんの面白味も感じられないような凡庸な作品に思われる(あくまでも筆者個人の意見です)。以下に、このテレビドラマの粗筋を紹介しよう。

物語の舞台は1970年代、学生運動が過激化する頃のローマ。主人公の一人シャロイヤ刑事は、目下、ある誘拐事件に取り組んでいる。この事件は一見何の変哲もないものであったが、一つ不可解な要素があった。首都ローマには4人以下の小ギャンググループしか存在していないはずなのに、10人程度の犯罪者集団によるものと推定される大がかりな犯行だったのである。熟練の刑事た

ちは、他の都市からきた連中の犯行だと決めつけて他署に案件を回してしまおうとしたが、一人シャロイヤはローマ人の犯行の線を手放さず探っていた。ひょっとすると、我々の知らぬ間に、首都ローマに巨大犯罪組織が形成されているのではないだろうか……。



【『犯罪小説』の作者ジャンカルロ・デ・カタルド】

そう、現にローマには、いまだかつてない規模の犯罪組織が誕生していた。しかもそれは、偶然の産物であった。ある日、4人のギャンググループを率いるカリスマ、リバネーゼ(Libanese)が自動車を盗まれた。転売されたその自動車を所有していたのは、これまた4人組を率いる冷徹なリーダー、フレッド(Freddo)であった。リバネーゼが車のありかを特定し、そこに駆けつける。二つのギ

ヤンググループが相見えると、一触即発の空気が流れた。ところが、リバネーゼは意外な行動に出る。今誘拐を計画しているのだが、それを実行に移すには人手がいる、だから、俺と手を組まないか…。フレッドに協力を求めたのである。フレッドは、リバネーゼの魅力に惹かれその要請を受け入れた。こうして首都ローマに誕生した未曾有の犯罪者集団は、かれらの活動していた地区の名から、マツリアーナ団(Banda della Magliana)と呼ばれた。



【指名手配されたマツリアーナ団の団員】

『犯罪小説』は、史実をもとにしたフィクションである。そして、一介の視聴者には、その史実とフィクションの境界線がよく分からない。1970年代のイタリアは、様々なテロ事件に見舞われる凄惨な時代(いわゆる「鉛の時代」)を迎えていたが、『犯罪小説』の物語もそうした歴史的大事件と複雑に絡み合いつつ展開する。例えば、モーロ事件について。モーロ事件とは、元総理大臣アルド・モーロが極左グループ赤い旅団に誘拐され、殺害された事件(1978年)のことであるが、『犯罪小説』においては、この事件ともマツリアーナ団が深い関係をもっていたことになっている。モーロが行方不明になった3月16日から彼の遺体が発見される5月9日までの間、当然のことながら、ありとあらゆる国家機関が総力を結集してモーロの捜索に取り掛かった。驚くべきは、スパイ諜報機関、秘密警察(Servizi Segreti)が、ナポリのマフィア組織カモッラに協力を要請していたことである。そしてそのカモッラが、ローマの人脈に強いマツリアーナ団に話を持ち掛けたのであった。国家と凶悪犯罪

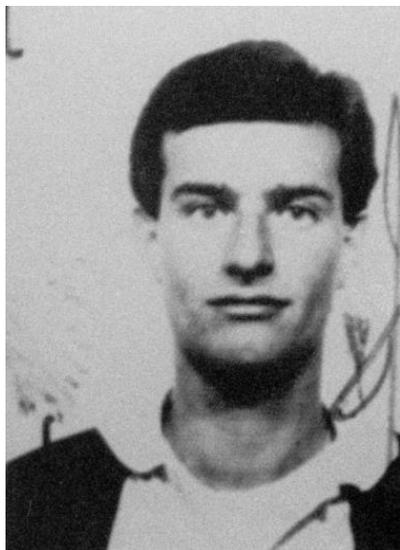
者集団の間に密接な関係が存在していたという衝撃の「事実」…。様々なテロ事件が発生し、そのほとんどについて犯人が特定できない異様な事態の中、マツリアーナ団は密かに勢力を拡大することに成功していたのである。

『犯罪小説』の中の筆者のお気に入り、第1シリーズの終盤になって登場する謎に満ちた人物ネーロ(Nero)である。彼が登場する頃、マツリアーナ団は、ライバルグループを撃破してローマを完全に掌握していた。だが突如、銀行強盗の容疑者としてフレッドが逮捕された。明白な証拠が存在していたわけではなかったが、彼のオートバイと同一のモデルが犯行に使用されていたことが判明し、それが逮捕の決め手となった。ところがリバネーゼは、団体行動を重んじるフレッドが何も言わずにそのような行為にでることはないと確信していた。真犯人を発見するため、マツリアーナ団はローマ中をしらみつぶしに搜索していく。しばらくして、それがネオファシスト連中の仕業だということが分かった。浮かび上がってきたのは、ネーロという名前である。だが、どこを探してもその人物は見つからない。マツリアーナ団のメンバーが苛立ちを隠さずにアジトに戻ってくると、そこには一人ビリヤードに興じる人の影が…。死をも恐れぬ男ネーロの登場である。

その後、犯行に使用されたオートバイが発見されたことにより、警察はフレッドの釈放を余儀なくされる。自由の身となったフレッドは、マツリアーナ団の賭博場のオープニングセレモニーに駆けつける。そこで彼が目目の当たりにしたのは、短期間でさらに成長したローマの犯罪集団の姿である。マツリアーナ団は、秘密警察との関係を深め、新たにシチリアのマフィア、コーザ・ノストラとも手を結び、投機家を雇うことでより大きな規模で資産を運用できるようになっていた。他の団員は狂乱の宴を楽しんでいたが、フレッドはそれに混じることができない。一人バイクにまたがると、「くそみたいなパーティーだな」という言葉がかかる。言葉の主は、ネーロであった。フレッドとネーロ。二人の一匹狼の間には、それ以上の言葉は必要ない。バイクに乗った二人は、パーティーを抜け出す。それ以来、ネーロとフレッドはある種の絆で

結ばれたような関係になる。ある日フレッドは、ネーロが一人の検察官を暗殺したことを察知し、問い詰める。なぜ、殺人を犯したのか。それに対してのネーロの答えはこうである。殺す能力があるから…。

この一風変わった登場人物ネーロには、実在のモデルがいた。極右団体 NAR (Nuclei Armati Revoluzionari、直訳すれば「武装革命集団」となる) とマツリアーナ団の橋渡しをした人物、マッシモ・カルミネーティがその人である。カルミネーティの犯罪者としての経歴はすさまじい。1980年代から、ありとあらゆる凶悪犯罪の容疑で逮捕されており、容疑をかけられた犯罪の中には、新聞記者ミーノ・ペコレッリの暗殺(1979)、ボローニャ駅爆破事件(1980)など、イタリア中を震撼させた事件も含まれていた。ところが、いずれの事件についても、裁判の結果、証拠不十分で無罪が宣告されている。イタリアは、犯罪者が捕まらない国なのだ！ 筆者は、2年前に『犯罪小説』を見ながら、司法制度について考えさせられたものである。推定無罪の原則がいかに貴いとはいえ、犯罪者が捕まらない社会というのも恐ろしいものだ。



【マッシモ・カルミネーティ】

ここで、この記事の冒頭に掲げた言葉を思い起こしてほしい。2014年12月4日のテレビ番組における、「現実が『犯罪小説』を凌駕しました。」という発言。実はその2日前の2014年12月2日、Mafia Capitale(首都マフィア)なる組織の構成員が、一斉に検挙されていたのである。Mafia Capitaleは、コーザ・ノストラ、カモッラ、ンドランゲダ(カラブリアのマフィア)と手を結び、麻薬取引、闇金融、詐欺、人身売買など、この世に存在するありとあらゆる犯罪を行っていた闇組織である。そして、何を隠そうマッシモ・カルミネーティその人が、この組織のボスだったのである。(この人物を有罪にできないイタリアの司法制度は、一体全体どうなっているのか?)

Mafia Capitaleの内実は、確かに想像の域を超えている。2008年から2013年の間ローマ市長を務めていたジャンニ・アレマンノも、彼らとの密接な関係が疑われ、家宅捜索の対象となった。彼の選挙活動の裏で、Mafia Capitaleが暗躍していたとさえ言われている。ローマ市政も秘密警察もこうした闇組織とつながっているとすれば、もはや民主主義が機能しているとは言い難い。こうして未曾有のスキヤンダルとなったMafia Capitale。事実は小説よりも奇なりとはよく言ったものである。今頃、『犯罪小説』の作者ジャンカルロ・デ・カタルドは、続編の執筆に勤しんでいることだろうか。

【図版の出典】

http://it.wikipedia.org/wiki/Giancarlo_De_Cataldo

http://it.wikipedia.org/wiki/Banda_della_Magliana

http://it.wikipedia.org/wiki/Massimo_Carminati

(元当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA?
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743.212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『素晴らしき自転車レース⑩』

最古の自転車メーカー ビアンキ

谷口 和久

●イタリアの国民的自転車

ビアンキというブランドは、ロードレースにとくに
関心がない人でも耳にしたことがあるのではない
だろうか。記録に残るかぎりでは、現存する中で
世界最古となる、イタリアを代表する自転車ブラン
ドである。

創業者のエドアルド・ビアンキ Edoardo Bianchi
は 1865 年、当時まだオーストリアの支配下にあっ
たミラノで生まれた。

当時はイタリア統一運動 Risorgimento のまっ
ただなか。エドアルドの父ルイージは、せっかく繁
盛していた自身の食料品店が混乱に乗じて打ち
壊されたり、統一戦争に従軍して負傷したりと、エ
ドアルドの生まれた頃には一家は非常に困窮し
た状態であった。



【エドアルド・ビアンキ】

画像出典: http://it.wikipedia.org/wiki/Edoardo_Bianchi

幼くして働き始めたエドアルドは、ミラノの様々
な鉄工関係の工房を渡り歩き、1885 年には市内
に自分の工房を立ち上げた。

その頃はまだ「オーディナリー」とよばれる、前
輪が異常に大きい、いわゆる「ダルマ型」の自転

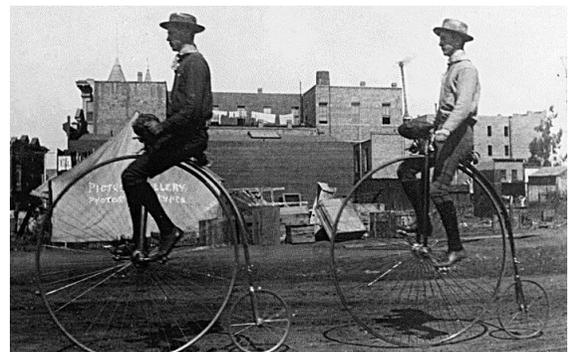
車の最盛期であったが、エドアルドは早くも創業
の翌年に、現代と同じような前後輪が同じサイズ
の自転車を手がけた。しかも、その当時まだ出始
めたばかりのゴム製のタイヤを取りつけて。

●19世紀の自転車

自転車の起源は諸説あるが、現在の定説では
1817 年にドイツの貴族カール・フォン・ドライス男
爵が発明したものが自転車のルーツとされる。こ
れは発明者の名前を取って「ドライジーネ」と呼ば
れるが、チェーンやペダルなどはなく、自分の足
で地面を蹴って進むもので、いってみれば「木製
の馬」といったようなもので、日ごろの移動や運搬
には、とてもじゃないが使いものにならなかった。
あくまで「貴族や金持ちの遊び道具」にすぎなか
った。

やがてペダルが発明されたが、当初はまだチ
ェーンは自転車に組み込まれておらず、三輪車
のように前輪を直接まわす仕組みになっていた。
ギアといったような便利なものもまだなかったの
で、スピードをあげるために前輪がどんどん大き
くなり、大人の背たけを超えるほどになった。ペ
ダルひとこぎで進む距離は、車輪が大きいほど伸
びるためだ。これがダルマ型自転車の成り立ちであ
る。

ただ、当然ながら人の背たけより高い位置に腰
かけて、しかも当時まだ舗装などされていないデ
コポコ・ガタガタ道を走るの、危険きわまりない
ものであった。イギリスでは「ボーン・シェイカー
(骨ゆすり機)」や「未亡人製造機」の異名をとつた
といわれる。これだけでも、当時の様子が伝わり
ますね。



【ダルマ型自転車】

画像出典: <http://en.wikipedia.org/wiki/Penny-farthing>

ダルマ型自転車の反省をふまえ開発されたのが「セフティー型」とよばれる、こんにち一般にみられるような前後の車輪が同じサイズの自転車である。これにより、自転車はよりいっそう普及していった。エドアルドの工房立ち上げは、まさに時流に乗ったものであった。

●レースの世界へ

世界的な自転車産業の流れをみると、20世紀に入った頃に、いったん足踏み状態となってしまう。19世紀にイギリス、アメリカ、フランスなどの先進国でふくらんだ自転車バブルがはじけてしまったのだ。ちなみに19世紀末のアメリカには大小あわせて300社(!)もの自転車メーカーがあり、年間120万台(!!)もの自転車が製造されたという。

イギリスやアメリカはその後モータリゼーションにシフトしていくわけだが、フォードに代表されるような大量生産システムは、自転車産業がその先駆けとなったことを付け加えておきたい。

一方でラテン圏のフランスやイタリアでは、英米ほどのバブル崩壊ではなかったこともあるだろうが、あらたな方策でさらに自転車を普及させていく道をたどった。すなわち、こんにちにつながる数々の自転車レースの誕生である。それら初期の自転車レースでは、自転車メーカーがチームのスポンサーとなったのである。

ここでひとつ断っておかなければいけないのは、当時、各メーカーがマスで売り込もうとしていたのはあくまで実用自転車、いわゆる「ママチャリ」のたくいであったということだ。

ビアンキも、第一次大戦前の1914年には自転車だけで4万5000台、さらにオートバイ1500台に自動車1000台もの生産数をほこった。当然ながら、従業員もそれに見あう数千人の単位でかかっていた。

レース用車両はあくまで宣伝の道具であり、自社の優位性を示すためのものであった。そういう意味で、当時の自転車メーカーの戦略は、自動車でいえば同国のフェラーリのスタイル—実用車の売り上げはレースのための資金源—というよりは、むしろ日本車やドイツ車に近いものといえるだろう。

「イタリアの自転車イコール、レースのための自転車」というイメージとなったのは、チネリやコルナゴといった(当時の)新興ブランドが第二次大戦後に立ち上がってからのことである。そして、これらの新興ブランドは、スタッフが元ビアンキの工員であるなど、直接的あるいは間接的にビアンキとつながっており、イタリア自転車界におけるビアンキの影響力の大きさをうかがわせる。

初期のレース、たとえばジロ・ディ・イタリアの記録をたぐってみると、第1回大会(1909年)では1位はアタラ Atala(当時の大手メーカー、ビアンキ最大のライバル)で、ビアンキは3位。翌年も1位はアタラに奪われ、ビアンキはトップ5にすら入っていない。ようやく第3回大会で首位となったが、その後もかならずしもコンスタントに勝利を重ねていたわけではなく、1920年代に入るとレニャーノ Legnano が圧倒的な強さを誇るようになる。レニャーノ・チームには、20年代にはアルフレード・ビンダ(初代世界チャンピオン)、そして続く30年代にはジーノ・バルタリといった、イタリアを代表するトップ選手が所属していたのだ。

ファウスト・コッピも、自身初のジロ優勝をかざった1940年はバルタリとともにレニャーノに所属していたが、翌年以降はたもとを分かちつたちでビアンキ・チームに移る。ここからビアンキの快進撃が始まったのである。



【ビアンキを駆るコッピ】

画像出典:

<http://www.siteducyclisme.net/beeldfiche.php?beeldid=1176>

“Un uomo solo è al comando; la sua maglia è biancoceleste; il suo nome è Fausto Coppi”

「ひとりの男が単独でレースを支配しています。そのウェアは白と空色。その名はファウスト・コッピ」。

今でもイタリアのレース中継を見たら、必ずといっていいほど耳にするこのフレーズ。1949年のジロでラジオ中継のアナウンサーが開ロ一番に口にしたものである。驚異的な独走勝利をはたしたコッピは、そのときビアンキ・チームの“biancoceleste”のジャージを身にまとっていた。

厳密には、ジャージの“celeste”と自転車に塗られた“celeste”は微妙に違う色調なのだが、やや緑がかった空色は世界中の自転車乗りの憧れだ。フェラーリ・レッドとともに、イタリアを代表するブランドカラーといえよう。この色は、エドアルドが自転車を献上したマルゲリータ王妃の目の色に由来すると言われている。エドアルドの粋な計らいが、こんにちまで命脈を保っているのだ。



【ギザッロ教会に展示されているコッピのビアンキ】

[参考資料]

Pier Bergonzi e altri, *100 anni di Giro*, Vallardi, 2009

『イタリアの自転車工房』（砂田弓弦著、アテネ書房、1994）

『イタリアの自転車工房物語』（砂田弓弦著、八重洲出版、2006）

『自転車物語スリーキングダム』（角田安正著、八重洲出版、2014）

『夢のロードバイクが欲しい!』（ロバート・ペン著、高月園子約、白水社、2012）

wikipedia 関連情報

(当館スタッフ)

イタリアンレストラン紹介

～京都～

Cantina Arco

南イタリアを思わせる白い壁とレンガの可愛いお店です。内陸部のシエナと海岸沿いのソレントで修行を積んだ女性シェフがつくるシンプルな料理、素材を活かしたイタリア料理店です。

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
ディナー御利用のお客様、コーヒーサービス
(期間:2/28まで)

住所:京都市中京区蛸薬師通麩屋町西入る
油屋町 145 洋燈館 1F

電話:075-708-6360

HP:favori.mond.jp/



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>